

## 第3章－5. 日本の近代思想

### 1. 幕末の思想

- ◎ 佐久間象山 (1811-64 暗殺、信濃松代藩士、兵学者)  
幕府の海防顧問。江川太郎左右衛門に西洋砲術を学ぶ。  
吉田松陰に密航をすすめたことで連座し松代に蟄居。のち京で暗殺。勝海舟も門下生の一人。  
「東洋道徳、西洋芸術」……和魂洋才
  
- ◎ 横井小楠 (1809-69 暗殺、熊本藩士、越前藩主松平春嶽の顧問)  
天地公共の理……国際平和をめざす開国を主張。  
儒教をもとに西洋議会政治・キリスト教を解釈  
「堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽くす」
  
- ◎ 吉田松陰 (1830-59 処刑、長州藩士)  
江戸で佐久間象山に学ぶ。1854年、ペリー再来時密航を企て失敗逮捕。  
1855年、萩に松下村塾を開く。塾生に高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文など  
1859年、安政の大獄で処刑 ← 無勅許での条約調印に激怒、老中暗殺計画  
一君万民論……天皇の下に中間支配階級を認めない、一種の平等主義  
草莽崛起 ……身分を問わない在野の人々（草莽の臣）による倒幕を説く
  
- ◎ 緒方洪庵 (1810-63)  
大阪に蘭学塾 適塾 を開く(1838)。種痘を始める(1849)。  
医の倫理。徹底した自学主義・原典主義。能力主義。  
福沢諭吉・橋本左内・大村益次郎らを輩出。

.....

### 3. 自由民権思想

下2名とも土佐藩出身

- ◎ 中江兆民 (1847-1901)  
『民約訳解』……ルソー「社会契約論」の翻訳 → “東洋のルソー”  
『さんすいじんけいりんもんどう三酔人経綸問答』……洋学紳士、豪傑君、南海先生の問答の形式  
“恩賜の民権”を育てていって実質的に“恢復の民権”に変えていく。  
1871年、岩倉使節団同行の官費留学生としてフランスへ。  
クレマンソーや留学仲間の西園寺公望(1849-1940)と知り合う。  
1881年、西園寺らと「東洋自由新聞」創立し主筆となる。
  
- ◎ 植木枝盛 (1857-92) ……「日本国国憲案」に抵抗権を盛り込む。主権在民。

## 2. 明治初期の啓蒙思想

※ 明六社 ……1873（明治6）年、森有礼の主唱で結成。「明六雑誌」刊行。

◎ 森有礼（1847-89）

『妻妾論』で封建的一夫多妻、男尊女卑批判。男女対等の「婚姻契約」主張。  
初代文部大臣、大日本帝国憲法発布当日に暗殺。

◎ 西周（1829-97、津和野藩藩医、森鷗外とも親戚）

philosophy を「哲学」（希哲の学）と翻訳。その他、多くの哲学用語の訳語案出  
主観・客観、帰納・演繹、理性、感性、分析、科学、芸術、技術など

◎ 津田真道（1829-97） ……1862年、西周とオランダ留学

帰国後、刑法など各種立法に尽力。実践主義・唯物論的

◎ 中村正直（1832-91、幕府儒官からキリスト教徒に）

『自由之理』 ……J.S.ミル「自由論」の訳、イギリス功利主義を紹介  
『西国立志編』 ……スマイルズ「Self Help」の訳、序文に「天は自ら助くる者を助く」

◎ 福澤諭吉（1835-1901）

『学問のすゝめ』（1872） ……平等、独立自尊、実学  
不平等の原因は「学ぶか学ばないか」にある  
一身独立して一国独立す（民権論と国権論の連続性）

『文明論之概略』（1875） ……西洋文明を摂取し近代化を図る  
未開→半開→文明の3段階。  
半開の日本には「有形にして数理学、無形にして独立の精神」が欠如。  
→丸山眞男『「文明論之概略」を読む』（岩波新書）

『脱亜論』 ……1885年3月16日「時事新報」社説で「脱亜入欧」を説く。  
1884年、朝鮮における甲申事変後の、朝鮮独立党に対する大虐殺を受けての論説

しかし同じ明六社でも

西村茂樹（1828-1902） ……欧化政策批判から国粹主義の先駆。  
1887 日本弘道会。「日本道德論」（儒教による国民道德回復主張）

加藤弘之（1836-1916） ……東大総長  
はじめは..「国体新論」（天皇も人類）  
→「人権新説」（1882） ……天賦人権論を否定。  
進化論・優勝劣敗に基づく国権論へ転向

## 4. キリスト教思想

### ◎新島 襄 (1843-90)

1864年、国禁を犯し渡米。1874年帰国。75年、同志社英学校創設。

### ◎ウィリアム・スミス・クラーク博士 (米、1826-86)

新島襄の紹介で来日。1876.7 札幌農学校の教頭(実質的に校長) 1877.5 離日(札幌滞在は8ヶ月)。

「Boys, be ambitious (少年よ、大志を抱け)」(農学校1期生との別れの言葉)

内村、新渡戸は農学校2期生。入学前にクラークは離日していたが、1期生を通じてキリスト教徒になる。

### ◎ 内村鑑三 (1861-1930)

1877年、札幌農学校入学。キリスト教入信。1884年渡米し神学を学ぶ。

1891年、第一高等中学校教師在職時、教育勅語奉読に際し敬礼せず辞職。(不敬事件)

・「2つのJ」……イエス (Jesus) と日本 (Japan) の双方を愛する。

・「武士道に接ぎ木されたるキリスト教」……著書『武士道と基督教』

・『代表的日本人』(1894年英文で著す)

西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮の5人の生涯を叙述。

岡倉天心『茶の本』, 新渡戸稲造『武士道』と共に,

日本人が英語で日本の文化・思想を西欧社会に紹介した代表的な著作。

・無教会主義……教会組織、儀式(洗礼など)に頼らず「聖書」の教えを深める

・非戦論……日露戦争に際して。(←日清戦争は正義の戦いとしていた)

### ◎ 新渡戸稲造 (1862-1933)

1877年、札幌農学校入学。同期の内村とともにキリスト教入信。

1883年、東大入学。翌年中退し渡米。……“太平洋の架け橋”

1887年、ドイツ留学(ボン大学)で農政学研究。

1891年、米国女性と結婚、帰国し札幌農学校教授。97年退官し静養。

1901年 台湾総督府民政部殖産局長就任。(兄玉源太郎台湾総督、後藤新平民政長官)

1906年 第一高等学校長に就任。東京帝国大学農学部教授兼任。

1920年 国際連盟事務次長に就任。

1926年 国際連盟事務次長を退任。貴族院議員に。

1933年、アメリカ大陸講演中、カナダで死去

・主著『武士道』……1899年、静養でアメリカ滞在中に英文で書いた。

「BUSHIDO, THE SOUL of JAPAN」

※内村鑑三は、武士道とキリスト教は融合できないから「接ぎ木」と表現した。

これに対して新渡戸稲造は、両者は融合できると考えていた。

## 5. 近代的自我と日本文学

### ◎ 夏目漱石 (1867-1916)

1893年、東京帝国大学卒業。東京高等師範学校英語教師。

1895年、高等師範学校辞職、愛媛県尋常松山中学校赴任。

(松山は東大同期の正岡子規の故郷で、子規とともに俳句に精進。)

1896年、熊本県第五高等学校英語教師に赴任。鏡子と結婚。

1900～03年、文部省派遣、英文学研究ためイギリス留学。

1905年、ホトトギスに『吾輩は猫である』を発表、連載をはじめ。

1907年、朝日新聞入社。職業作家としての道を歩みはじめる。

- ・ 講演録『私の個人主義』（講談社学術文庫）  
「私の個人主義」（1914）、「現代日本の開化」（1912）、  
「道楽と職業」「中味と形式」「文芸と道徳」の5講演を収録。
- ・ 自己本位 ……他者を尊重しながら、他者とは異なる自己の生き方を貫くこと  
……国家的道徳というものは、個人的道徳に比べるとずっと段の低いものように思える…。  
だから国家の平穏な時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きを置く方が、私にはどうしても  
当然のように思われます。  
↓
- ・ 則天去私  
現実社会の全体主義と、その対極のエゴイズムに絶望して東洋的無我の境地へ？  
しかし彼自身が、そうした考え方をハッキリ表明したことはないはず。

### ◎ 森鷗外 (1862-1922) ……『舞姫』、諦念 (レジグナチオン)

### ※伝統主義から国粹主義へ

- ・ 岡倉天心 (1862-1913) ……「アジアはひとつ」
- ・ 徳富蘇峰 (1863-1957) ……平民主義→日清戦争後、国家主義へ
- ・ 三宅雪嶺 (1860-1945) ……1888 政教社、雑誌『日本人』。日本主義 (国粹主義)
- ・ 陸 <sup>くが</sup> <sup>かつなん</sup> 羯南 (1857-1907) ……1889 新聞『日本』。国民主義。

## 6. 近代日本の哲学

### ◎ 西田幾多郎 (1870-1945)

石川県生まれ。石川県専門学校に学ぶが、同校が第四高等学校となり武断的校風になったため度々学校と対立し中途退学。1891年、21歳で東京帝国大学哲学科に入学するが、高校中退のため本科ではなく選科（聴講生）で、図書室が使えないなどの差別待遇を受けた。

卒業後、1895年、石川県の能登尋常中学校七尾分校教諭、1896年、第四高等学校講師。

1897年、禅の修行を始める。1899年、四高を解職され山口高校教授となるが、同年、四高教授となる。

1910年、京都帝国大学助教授。1913年、同教授。1928年定年退職。1945年6月7日、鎌倉で死去。

主著『善の研究』（1911）……旧制高校生の必読書、日本初の哲学書

- ・ 純粋経験 …… “<sup>しゆかくみぶん</sup>主客未分” の状態こそが真の實在  
自分（主観）が音楽（客観）に没頭している。  
そのことを意識せず「音楽と自分が一体化した状態」  
「個人あって経験あるにあらざ、経験あって個人あるのである」  
⇔ デカルトに始まる西洋哲学の近代的自我
- ・ 「善」 ……自己実現、self-realization  
しかし「自己」は常に他者とともにある。  
→純粋経験を成り立たせる「主客合一」の力に従う。  
真の自己を知れば、「人類一般の善」「宇宙の本体」と融合できる

論文『絶対矛盾的自己同一』（1939）

現実世界は「対立するものが、対立・矛盾はそのままに一つのまとまりを保っている」  
時間も、過去と未来の対立の中で、「永遠の今」として現在が成り立っている。

### ◎ 和辻哲郎 (1889-1960) ……主著『人間の学としての倫理学』（1934）

- ・ 人間のあり方を 間柄的存在 ととらえる。  
人は、個人（近代ヨーロッパ的個人）として存在すると同時に、  
人と人との関係において存在する、という二面性がある。

『風土 一人間学的考察』（1931）

……モンスーン型、砂漠型、牧場型に文化を分類（前述）

『古寺巡礼』（1919）

……奈良の仏教美術に中国・インド・ギリシアとの共通点を指摘

## 7. 民俗学など

### ◎ 柳田国男 (1875-1962)

『遠野物語』(1910)。1911年から南方熊楠と文通。  
1914年、貴族院書記官長。1921年、国際連盟委任統治委員。  
1947年、自宅に民俗学研究所設立。

“常民” ……無名の人々。民間伝承を保持している農林漁民。民俗学の対象。  
folkの訳として柳田が造語。平民・庶民だと政治身分的語感が伴うため避けた。

- ・女の労働はあたりまえ。常民の労働においては男女差別なし。
- ・霊は永久にこの国土のうちに留まって、遠方へ行ってしまふことはない。

↓

死者の霊は子孫の追慕・祭祀によって生前のケガレが清められ先祖の霊と融合する。  
先祖の霊は、村を見おろす山から子孫の生活を見守り、山や田の神となり農耕を助け、  
正月・盆・祭りなどの年中行事には家を訪ねて子孫と交歓する。

### ◎ <sup>みなかたぐまぐす</sup>南方熊楠 (1867-1941) ……在野の生物学者、民俗学者

生まれながらの博覧強記。1884年東京大学予備門入学、86年中退し渡米。  
1892年渡英、96年大英博物館嘱託。1900年帰国、南紀・熊野などで植物調査。

1909年、**神社合祀反対論**を発表

- ①. 敬神思想を薄くする、②. 民の融和を妨げる
- ③. 地方の凋落をきたす、④. 人情風俗を害する
- ⑤. 愛郷心・愛国心を減ずる、⑥. 治安・民利を損する
- ⑦. 史蹟・古伝を亡ぼす、⑧. 学術上貴重の天然記念物を滅却する

神社合祀……1町村1神社を原則とする政策。

多くの神社が廃されたが、1918年に中止される。

↓

環境問題へのアプローチとして現代にも通じる。

……「鎮守の森」を守ることは、上の“常民”の靈魂観にとっても重要  
(照葉樹林)

### ◎ <sup>おりくち しのみ</sup>折口信夫 (1887-1953) ……詩人としては「釈超空」の筆名

古代学 『古代研究』『死者の書』

神の原型は「客人(まればと)」 = 「常世の国」<sup>とこよ</sup>から定期的に村を訪れる

### ◎ <sup>むねよし</sup>柳宗悦 (1889-1961)

それまでは「下手物(げてももの)」とされてきた

無名の民衆の工芸の美に注目……「民芸」